NEXT GENERATION

私たち大洲消防の対応手順が先駆的モデルに



私は、岡山県で生まれ育ち、救急救命士の資格を取得後、令和４年度から自然豊かな大洲市で消防職として働き始めました。入職後すぐに愛媛県消防学校（松山市）に入校し､61期生64人（うち女性10人）の一人として、消防の基礎を学び、仲間との絆を深めました。

大洲は歴史ある観光スポットが多く、外国人観光客も増えています。先日の救急現場では、スイス人観光客が自転車走行中にけがをし、とても困惑していました。英語でのやり取りにはスマートフォン翻訳アプリを使い、状況や痛みなどを素早く聞き取って病院へ搬送しました。活動現場でも多言語での対応が求められる時代です。また、愛媛県メディカルコントロール協議会主催の合同症例検討会が令和８年10月にあり、私は南予代表として発表しました。県内の医師や医療関係者、救急救命士らを前に、「病院受診歴のない妊婦の自宅分娩対応と事後の事務処理について」を発表した経験も貴重でしたが、この発表事例が評価され、医師が出産に立ち会えず、出生証明が困難な状況で私たちが行った対応手順が、県内で共有すべき先進事例として位置づけられたことは、とても励みになりました。

人を助けるのが私の仕事ですが、職場の上司や同僚、周囲の人たちに支えられて、仕事や生活ができているのだと実感しています。消防・救助の現場は、ドラマや映画に登場するような美談ばかりではありません。基本に忠実に現場での経験を積み重ね、最新の情報や技術を取り入れる地道な努力が必要です。消防職はストレスにさらされることも多く、危険と隣り合わせの仕事です。「ずっと続けたい」と簡単に言えるほど甘い職業ではありませんが、人々の命や財産を守る大切な仕事です。就職を考えている学生や同世代の人たちにも、ぜひ消防職を目指してほしいです。

大洲地区広域消防事務組合
大洲消防署本署・救急救命士
清水　明日香（あすか） さん

救助する立場の自分が事故やケガをしていては、その責任を果たせないと気を引き締める26歳。時には趣味のイカ釣りで、海を眺めてリフレッシュ。

大洲の風景



フラワーパークおおずのコスモス　10月20日㈫撮影

今月の表紙



10月18日㈰開催の「えひめYOSAKOI祭り」での一枚。大洲を拠点に活動する羅り瑠れ櫓連（ら・る・ろ・れん）のみなさんが、迫力ある演舞を披露し、会場を盛り上げました。